

同性親友を想定した成人愛着スタイル尺度作成の試み

水津, 優太
九州大学大学院人間環境学府

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

小林, 美緒
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/6770658>

出版情報：九州大学心理学研究. 24, pp.9-16, 2023-03-07. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



同性親友を想定した成人愛着スタイル尺度作成の試み

水津 優太 九州大学大学院人間環境学府
加藤 和生 九州大学大学院人間環境学研究院
小林 美緒 九州大学大学院人間環境学研究院

Developing the Adult Attachment Style Scales for Close Friendships of the Same Sex

Yuta Suizu (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Kazuo Kato (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Mio Kobayashi (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

In the adult attachment literature, most of the available scales are on romantic or general-other relationships, but not on the same-sex close relationships. Given the importance of the same-sex friendships in adolescence, we attempted to develop an adult attachment style scale for close friendships of the same sex (ECR-CFSS: the Experiences in Close Relationships scale for Close Friendships of the Same Sex), and to examine its reliabilities and validities. 215 college students were asked to select one of their same-sex close friends and respond to a questionnaire, including ECR-CFSS, other theoretically related scales. We examined reliabilities (α coefficients and test-retest) and factorial and criterion-related validities. Findings were generally supported; however, it was suggested that further examination on the validities of Other-View might be needed with other scales.

Key Words: adult attachment, same-sex close relationships, scale development, adolescence

Hazan & Shaver (1987) は、成人恋愛のプロセス（恋愛関係を形成していく過程）の中に、愛着に類似したプロセスがあると考えた。以降の成人愛着研究では、恋人を愛着対象として数多くの愛着スタイル尺度が開発されてきたが、Brennan et al. (1998) により親密な対人関係体験尺度（Experiences in Close Relationships scale, 以下 ECR とする）が作成されると、以降 ECR が幅広く使用されるようになった。ECR はそれまでに作成された 14 の愛着スタイル尺度から作成されており、また信頼性と妥当性も十分に確認されている。日本でも、恋人版 ECR（中尾・加藤, 2004a）、一般他者版 ECR（ECR-GO: 中尾・加藤, 2004b）が作成されている。現在、これらの尺度は日本の成人愛着研究において、愛着スタイルを測定する規準の尺度になっている。

ECR は Bartholomew & Horowitz (1991) の 2 次元 4 分類モデルに従っている。Bowlby (1973 黒田・岡田・吉田訳 1977) によると、愛着の内的作業モデルは、自己についての内的作業モデル（以下、自己観とする）と他者についての内的作業モデル（以下、他者観とする）から構成される。自己観とは、自己は愛着対象が援助を与えられやすい種類の人間かどうかであり、他者観とは、愛着対象は援助や保護の求めに応答する種類の人であるかどうかである。ここで、Bartholomew et al. (1991) は、自己観と他者観について次のことを仮定した。すなわち自己観については、自分の評価をどれだけ他者からの受

容に依存しているかの程度である。これは、他者への依存が低いほど自尊感情や自己受容を自分自身で維持できることを意味しており、依存が低いほど自己観はポジティブ、依存が高いほど自己観はネガティブである。また、他者観を、親密さの回避と考えた。具体的には、他者との親密性を回避しないほど他者観はポジティブ、回避するほど他者観はネガティブである。したがって、2 次元 4 分類モデルはこの 2 つのモデルがポジティブかネガティブで構成され、これにより 4 つの愛着スタイル（安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型）が区別される。

ところで、青年期・成人期の同性親友関係は個人にとって非常に重要な意味を持つ関係である。青年期・成人期における親友関係は、恋愛関係よりも築かれやすい身近な関係である。また、親友関係は対人関係の質や心理的な幸福と関連し、それゆえ重要な発達の要因であることが明らかになっている（Parker & Asher, 1987）。

そのような親友関係について、Mikulincer & Selinger (2001) の研究では、場面想定法ではあるものの、状況に応じて親友が愛着の対象になりうる事が示されている。この研究以外にも成人愛着研究において愛着対象を同性親友に焦点に当てた研究も存在している（e.g., Klohnen, Weller, Luo, & Choe, 2005）。

この親友関係が、青年期・成人期の愛着関係を理解する上で、理解の本質となる。というのも、親友関係は母子関係や恋愛関係と同様に、安心感やサポートを求める

といった点が類似している (Mikulincer et al., 2001) が、複数の相手を作り、関係が排他的でなくオープンなものである点から母子関係や恋愛関係と異なっている (Weiss, 1998)。この親友関係と母子関係、恋愛関係の類似点、相違点を中心とした検討は、愛着関係のプロセスの形成や特徴の包括的な理解の上で非常に意義深いものとなる。一方、日本における成人愛着研究では、愛着が親友関係にどのような影響を与えているかについて検討した研究は存在する (e. g. 金政, 2007; 林田・黒川・喜田, 2018)。しかし、愛着対象として同性親友に焦点を当てた研究は十分になされておらず、親友関係はどのような点から愛着関係として認められるのか、またどのように愛着関係に類似したプロセスが形成されるのか、といった点についてまだ実証されていない。

このことを踏まえると、今後同性親友関係を愛着対象として検討することは愛着理論に新たな知見を与えると考えられる。そしてこの愛着対象を同性親友として研究を行う際、愛着プロセスを標準的尺度である ECR を用いて再現できるか検討することが重要である。以上より、本研究では親友関係に関する愛着研究の基盤となる、ECR の同性親友版の作成を試みることにする。

本研究の目的は、同性親友版 ECR として項目内容を作成し、Brennan et al. (1998) と同様に 2 因子を抽出できるか検討することである。また、妥当性と信頼性についても検討する。

妥当性について、2次元4分類モデルの立場に従い、次の予測を立てる。すなわち、自己観がネガティブなとらわれ型や恐れ型は、自己観がポジティブな安定型や拒絶型に比べて、自己観に関連する自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) の得点が有意に低いであろう。また、他者観がネガティブである拒絶型や恐れ型は、他者観がポジティブである安定型やとらわれ型に比べて、他者観に関連する対人信頼感尺度 (堀井・植谷, 1995) 得点が有意に低いであろう。

また実験場面を想定して併存的妥当性を検討する。具体的には、同性親友版 ECR で捉えたものが、実際に大学生の同性親友関係、とくに相談する場面における行動パターンをいかに説明できるかを確認する。ここで相談する場面挙げた理由として、日常場面において愛着行動を喚起されやすいようなストレス状況であり、回答者にとって想定できる普遍的な状況だと考えられるからである。また、愛着スタイルとストレス状況下による相互依存やサポート提供といった行動的指標に関連する研究は数多く存在する (金政, 2003)。そのため、同性親友版 ECR による愛着行動パターンの予測が立てやすいからである。具体的な想定内容として、参加者が親友に悩みの相談を行う状況において、親友にどれほど悩みに関する援助をしてもらいたいのか (以下、サポート欲求とす

る)、またその悩みを抱えることにどれほどストレスを抱えているか (以下、ストレス度とする) についてである。ここで、サポート欲求は他者観、ストレス度は自己観に関連すると予測される。他者観はネガティブであるほど、他者に関するイメージは否定的であり、他者との親密な関係を避ける傾向にある (e.g., 堀・小林, 2010)。このことを踏まえると、問題や悩みに直面した時、他者観がネガティブであるほど、他者に援助を求めようとせず、自己で問題を解決しようという行動が予測される。すなわち、他者観とサポート欲求は正の相関関係であり、他者観がネガティブであるほど、サポート欲求は低くなると予測される。実際、サポート欲求尺度を用いて、ストレスサーに対して友達にどれほどサポートしてほしいかを愛着スタイルごとに分析したところ、他者観がネガティブであるほど、他者観がポジティブな人に比べサポートを求めないことが明らかにされている (丹羽, 2003)。一方、自己観とストレス度は負の相関関係であり、自己観がネガティブであるほど、心理的ストレスが高い。実際、就学前の大学生において、自己観がネガティブであるほど、心理的ストレスが高くなることが確認されている (栗栖・安藤, 2011)。このことを踏まえると、相談場面における悩みに対してのストレス度は、自己観がネガティブであるほど高くなることが予測できる。

信頼性について、内的整合性に加え再テスト法による信頼性の検討を行った。1回目の調査を行い一定の期間後、再度同様の回答者に調査 (調査2) を行った。

方 法

調査1

回答者 回答者は大学生 228 名 (平均年齢 20.8 歳; 男 118 名, 女 105 名, その他 5 名) であった。

調査時期 2021 年 11 月から 12 月にかけて実施した。

質問紙 質問紙はフェイスシート (性別, 年齢, 大学名) と 8 つの質問から構成された。8 つの質問とは、親友の選択, 親密度尺度, 同性親友版 ECR, 自尊感情尺度, 対人信頼感尺度, 悩みの想起, サポート欲求尺度, ストレス尺度, である。尺度の評定はすべて、7 件法 (1 = 「全く当てはまらない」から、7 = 「非常によく当てはまる」) を用いた。なお質問紙の最後に、再調査の協力に同意した回答者には、メールアドレスを記入してもらった。

親友の選択 同性親友版 ECR を作成する上で、親友をひとり選択することが必要となる。そこで、尺度項目の内容に加え、親友を選択する教示文を作成した。同性親友版 ECR で測定する前に、以下の教示文で同性の親友をひとり選択してもらった。ここで選択してもらう親

友とは、Mikulincer et al. (2001) による親友関係の特徴をもとに、安心感があり、サポートしてもらえそうな人を選ぶように教示した。教示文は以下の通りである。

あなたが大学生活において気軽に会うことができる友達のなかで、「心から親しく感じている同性の親友」を一人思い浮かべてください（例：あなたのことをよくわかっていると感じている人、良いことも悪いことも何でも話せ、話したらホッとできる人など）。

親密度尺度（金政・大坊，2003） 友人関係の親密さを統制する目的として、愛情の三角理論尺度（金政・大坊，2003）の下位尺度の1つである親密性尺度（10項目）を用いた。この得点の平均値を「親密度」とした。なお、 $\alpha = .91$ である。

同性親友版 ECR 一般他者版 ECR（中尾・加藤，2004）を基にして作成した。一般他者版 ECR は、一般他者に対する愛着スタイルを測定するための尺度であり、2因子でそれぞれ18項目と12項目の30項目から構成されている。しかし本研究では、愛着対象として「同性の親友」を想定している。そのため、この尺度の前に親友の選択、親密度尺度による測定を行った後、教示文にある「人」の代わりに「その友達」という言葉を用いることで、選択した親友を想定してもらった。それに伴い、項目の修正・追加を行った。教示文は次の通りであった。以下の文章は、あなたがその友達に対してふだんからいつも感じたり思ったりしていることに、どれくらいよく当てはまりますか。全く当てはまらない1—2—3—4—5—6—7 非常によく当てはまる

自尊感情尺度（Rosenberg，1965 加藤訳 1998） この尺度は、自己について全般的にどのような見方をしているかについて測定するための尺度（10項目）である。この得点の平均値を「自尊感情得点」とした。また、 $\alpha = .81$ である。

対人信頼感尺度（堀井・梶谷，1995） この尺度は、他者について全般的にどのような見方をしているかについて測定するための尺度（17項目）である。この得点の平均値を「対人信頼感得点」とした。また、 $\alpha = .80$ である。

同性親友に相談する悩みの想定 回答者は、同性親友版 ECR、自尊感情尺度、対人信頼感尺度の評定をそれぞれ行った後、次の教示に対して自由記述による回答を行った。

あなたが、その友達になら話してもよいと思うような悩み（以降：その悩み）をひとつ挙げ、簡潔で結構ですので記述してください。その悩みはあなた個人のみに関するものでも、その友達との間に生じているものでも、どのようなものでも構いません。（例：卒業後の進路について、親と相談したが決めきれずに困っている、など）

サポート欲求尺度 回答した悩みに対し、どの程度同

性の親友にサポートしてもらいたいと測定する目的として、サポート欲求尺度（福岡・橋本，1997）より、情緒的サポートの項目の語尾を「～してほしい」と替えて用いた（6項目）。なお、情緒的サポートは「アドバイス・指導」、「なぐさめ・はげまし」の2因子から構成されている。この得点の平均値を「サポート欲求得点」とした。 $\alpha = .89$ である。

ストレス尺度 回答した悩みに対し、どの程度ストレスを抱えているか測定する目的として、SRS-18（鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野，1997）を用いた。SRS-18 は、ストレスサーに対し、ストレス反応として表出される情動を測定する尺度となっている。本研究では、回答した悩みをストレスサーとし、それをどれほどストレスとして認知しているかを情動表出の点から測定している。なお、「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の3因子から構成される。ただし、回答者の負担を考慮して、3因子18項目のうち各因子において因子負荷量の高い項目3つをそれぞれ選択して用いた（9項目）。この得点の平均値を「ストレス度」とした。また、 $\alpha = .87$ である。

配布方法と所要時間 質問紙は紙媒体ではなく、web アンケート（Google フォーム）を用いた。web アンケートの URL を添付したメールを3つの大学を学生に送った。所要時間は15分だった。

倫理的配慮 調査は無記名であり、調査への回答に先立って、回答が任意であり途中で回答を中断してもよいことを確認してもらった。また個人情報に関しては最大限の配慮を行った。

調査2

回答者 上記の調査で回答した回答者のうち、メールアドレスを記入した45名（平均年齢21.3歳；男23名、女22名）であった。

質問紙 フェイスシート（性別、年齢、大学名）と親友の選択、親密度尺度、同性親友版 ECR により構成された。親友の選択では、確認として、選択する前に「あなたにとって、心から親しく感じている同性の親友はいますか」という質問を行った。この質問は「はい」または「いいえ」で回答してもらった。また、尺度については、調査1で用いたものと同じである。調査1の回答と照らし合わせるため、質問紙の最後に調査1と同様のメールアドレスを記入してもらった。

調査時期 2021年12月12日から実施した。調査1から調査2までの調査期間は回答者により異なり、平均で16日間であった（ $M = 16$, $SD = 2.2$ ）。調査期間は最短で14日間、最長で21日間であった。

配布方法と所要時間 web アンケートによる調査（Google フォーム）を、メールアドレスを記入した回答

者に個別でEメールを通して送った。所要時間は約5分であった。

倫理的配慮 1回目と同様に調査は無記名であり、調査への回答に先立って、回答が任意であり途中で回答を中断してもよいことを確認してもらった。また個人情報に関しては最大限の配慮を行った。

結果と考察

同性親友版 ECR の 30 項目について、因子分析を行い、Brennan et al. (1998) と同様に 2 因子を抽出することができるか検討した。また、同性親友版 ECR の項目が、

従来の ECR と同じ因子に対応しているか検討した。そこで、30 項目を 2 因子解で最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。なお固有値は、第 1 因子から順に、9.05, 3.67, 1.64, 1.44, 1.23, 1.19 となったため、2 因子解が適当であると判断した。また、解釈可能性と因子負荷量がいずれかの因子に .40 以上であるという基準により、4 項目を削除した 26 項目が適当であると判断した。2 因子による累積説明率は 41.00% であった (Table 1)。項目について、従来の ECR と同じ因子に対応しているか検討したところ、同性親友版 ECR の自己観、他者観のそれぞれの項目は、Brennan et al. (1998) による ECR、日本語版 ECR (中尾・加藤, 2004a) およ

Table 1
同性親友版 ECR の因子分析結果 (最尤法, プロマックス回転) (N=215)

項目	因子負荷量		共通性
	第 1 因子	第 2 因子	
第 1 因子：見捨てられ不安			
02. 私はその友達から見捨てられ、一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する。	.77	.03	.61
12. 私は、その友達に見捨てられるのではないかと心配だ。	.74	.24	.73
16. 私は、その友達を失うのではないかと結構心配している。	.74	.07	.59
21. 私は、私がいてほしいと望むくらいにその友達がそばにいてくれないと、イライラしてしまう。	.71	-.04	.49
10. 私は、その友達との関係について、非常に心配している。	.68	.12	.53
28. 私は、友達がもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示してほしいと感じるときがある。	.67	-.11	.41
30. 私は、その友達が私のことをほっといて自分一人で何かをすることに腹が立ってきしまう。	.65	-.10	.39
08. 私がその友達のことを大切に思うほどには、その友達が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する。	.63	-.08	.44
15. 私は、その友達が必要な時にいつでも私のためにいてくれないとイライラする。	.63	-.02	.39
20. 私には、その友達が私に対して好意的であるということを何度も何度も言う必要がある。	.63	-.12	.36
26. 私はその友達と付き合いがないと、何となく不安で不安定な気持ちになる。	.59	-.14	.31
22. 私はその友達に自分のことを好きになってもらうことができなかったら、私はきっと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする。	.57	-.03	.31
18. 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどきその友達はうんざりして私から距離を取る。	.54	.19	.40
27. 私はいつも、その友達が私に対して抱えている気持ちが、私がその友達に対して抱いている気持ちと同じくらい強ければいいのになと思う。	.52	-.17	.23
04. 私は、その友達から見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない。	.48	.24	.37
13. 私がその友達ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどきその友達はうんざりして私から距離を取る。	.44	.16	.27
第 2 因子：親密さの回避			
01. 私は、その友達に何でも話す。	-.12	.78	.56
09. 私はその友達に頼ることに抵抗がない。	.08	.68	.51
03. 私はたいいてい、その友達と自分の問題や心配ごとを話し合う。	-.30	.66	.39
05. 私は、その友達になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない。	.06	.66	.47
07. 私は、心の奥底にある考えや気持ちをその友達に話すことに抵抗がない。	.01	.62	.39
19. 私は、その友達と親密であることがとてもこちよい。	-.18	.61	.33
23. 私は比較的容易にその友達と心理的距離を近づけることができると思う。	-.05	.57	.31
14. 心の奥底で何を感じているかをその友達にみせるのはどちらかというと好きではない。	.20	.48	.34
16. 私はその友達とあまりにも親密になることがどちらかというと好きではない。	.14	.45	.27
17. 私はその友達と過度に親密にならないようにしている。	.10	.41	.21
累積寄与率 (%)		.25	.41
因子間相関			.35

びその一般他者版（中尾・加藤，2004b）と同様の因子に対応していた。Brennan et al. (1998) に従い，第1因子を「見捨てられ不安（自己観）」，第2因子を「親密さの回避（他者観）」と名付けた。また，高い内的整合性（信頼性）を得ることができた（見捨てられ不安（自己観）： $\alpha = .91$ ，親密さの回避（他者観）： $\alpha = .84$ ）。以上より，同性親友版 ECR には，因子的妥当性と内的整合性による信頼性が確認されたとと言える。次に，同性親友版 ECR の基準関連妥当性を検討した。同性親友版 ECR の「見捨てられ不安（自己観）」の16項目，「親密さの回避（他者観）」の10項目の得点の平均値をそれぞれの得点とした（以下，自己観得点，他者観得点とする）。なお，自己観（他者観）得点が高いほど，自己観（他者観）がネガティブであり，自己観（他者観）得点が高いほど，自己観（他者観）がポジティブである。次に自尊感情得点，対人信頼感得点，サポート欲求得点，ストレス度，の各項目についてそれぞれ得点を算出した。ただし，対人信頼感を用いて分析する際に，項目を再検討したところ，いくつかの要素が含まれていると考えられた。というのも，対人信頼感尺度は愛着場面に限らず日常場面における対人信頼感を捉えているため，項目を見ると明らかに愛着の文脈に相応しくないものがみられた。した

がって因子分析を行った（最尤法・プロマックス回転）ところ因子構造が3因子であり，それぞれ因子負荷量の高い項目から，それぞれ「他者は利己的」，「他者は用心深い・信用できない」，「他者は誠実だ・よいもの」と命名した（Table 2）。このうち，対人信頼感尺度のうち第3因子「他者は誠実・よいもの」の得点を用いた。その理由として，第1因子では回答者である大学生にとって，項目の内容を容易に想像できないものが多く含まれていた（例として，項目番号15 人は，チャンスがあれば税金をごまかす）。また，第2因子は信用についての有無を内容としているが，他者観とは Bowlby (1973 黒田他訳 1977) が述べた通り，他者が援助や保護を与えてくれる種類の人物かどうかであり，他者への信用の有無とは必ずしも関連するとは限らないと言えるためである。

次に自己観，他者観の各中央値を基準にして，中央値より自己観得点が高い（低い）群を自己観高群（低群）とし，中央値より他者観得点が高い（低い）群を他者観高群（低群）とした。また，自己観得点と他者観得点とともに低い群を「安定型群」，自己観得点が高く，他者観得点が低い群を「とらわれ型群」，自己観得点が低く，他者観得点が高い群を「拒絶型群」，自己観得点と他者

Table 2
対人信頼感尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量			共通性
第1 因子：他者は利己的 $\alpha = .73$	第1 因子	第2 因子	第3 因子	
17 人は、やっかいなめにあわないために、うそをつく。	.67	.00	-.14	.40
6 人は、成功するためにうそをつく。	.67	-.08	-.06	.39
16 人は、他人の権利を認めるよりも、自分の権利を主張する。	.58	-.05	-.10	.28
7 人は、近ごろだれも知らないところで多くの罪を犯している。	.56	.04	.04	.34
2 人は、多少良くないことをやっても自分の利益を得ようとする。	.51	.05	.05	.38
15 人は、チャンスがあれば税金をごまかす。	.45	-.11	-.11	.19
12 人は、口先ではうまいことを言っても、結局は自分の幸せに一番関心がある。	.36	.16	.16	.20
3 人は、あまり頼りにできるような人がわずかしかない。	.27	.12	.12	.18
第2 因子：他者は用心深い・信用できない $\alpha = .69$				
9 人は、だれかに利用されるかもしれないと思い、気をつけている。	.03	.78	-.21	.58
10 人は、ほかの人を信用しないほうが安全であると思っている。	-.12	.66	.19	.47
4 人は、ほかの人の親切に下心を感じ、気をつけている。	.17	.53	.00	.37
11 人は、ほかの人に対して、信用してもよいということがはっきりわかるまでは、用心深くしている。	-.02	.49	-.04	.22
13 人は、ほかの人を援助することを内心ではいやがっているだろう。	-.06	.39	-.01	.14
第3 因子：他者は誠実だ・よいもの $\alpha = .67$				
8 人は、ふつうほかの人と誠実にかかわっている。	-.26	.14	.80	.59
5 人は、ふつう清く正しい人生を送る。	.04	-.15	.69	.46
14 人は、自分がするといったことは実行する。	-.01	-.08	.52	.26
1 人は、基本的には正直である。	.14	.02	.46	.29
累積寄与率	.13	.24	.34	
因子間相関				
第1 因子 - 第2 因子	.36			
第1 因子 - 第3 因子	.40			
第2 因子 - 第3 因子	.25			

観得点がどちらも高い群を「恐怖型群」と命名した。その後、独立変数を自己観得点、他者観得点、従属変数を自尊感情得点、「他者は誠実・よいもの」得点とする2×2参加者間分散分析を行った (Table 3)。その結果、自尊感情得点について、自己観得点の主効果が有意であった。愛着スタイルごとに平均値を算出したところ、予測された通り、自己観がネガティブなとらわれ型や恐れ型は、自己観がポジティブな安定型や拒絶型に比べて、自尊感情得点が有意に低かった。また「他者は誠実・よいもの」得点について、他者観得点の主効果が有意な傾向であった。他者観がネガティブである拒絶型や恐れ型は、他者観がポジティブである安定型やとらわれ型に比べて、「他者は誠実・よいもの」得点が有意に低い傾向が示された。このことから、同性親友版 ECR は自己観において理論的に関連のある尺度との間に妥当性があると言える。他者観について、愛着スタイルの得点が予測された方向での結果であり、ある程度の理論的な整合性が見られるが、十分に他者観を反映していると認めることはできない ($F(1, 211) = 3.63, p = .058$)。そのため、今後さらに別の他者観に関する尺度を用いて検討する必要がある。また、併存的妥当性を検討するため、ストレス度、サポート欲求得点についても同様に2×2参加者間分散分析を行った (Table 3)。その結果、ストレス度について、自己観得点の主効果が有意であった。予測さ

れた通り、自己観がネガティブなとらわれ型や恐れ型は、自己観がポジティブな安定型や拒絶型に比べ、ストレス度が有意に低かった。また、サポート欲求得点についても、他者観得点の主効果が有意であった。予測された通り、他者観がネガティブである拒絶型や恐れ型は、他者観がポジティブである安定型やとらわれ型に比べて、サポート欲求得点が有意に低い傾向が示された。この結果、同性親友版 ECR を用いることで、相談する場面を想定した実験において、先行研究から予測された結果が再現された。すなわち、同性親友版 ECR で予測される行動は、愛着理論に相応する形で動いていると言える。以上より、この尺度が愛着場面に用いた時に予測される愛着行動を測定することに有効である。

次に信頼性について、再テスト法を行い検討した。回答者 45 名のうち、親友がいないと回答した 4 名を除いた 41 名 (男: 21 名, 女: 20 名) をデータとして使用し、1 回目と 2 回目の調査での同性親友版 ECR の 2 尺度値をそれぞれ算出した。α 係数を算出したところ、高い内的整合性が得られた (自己観得点: $\alpha = .90$, 他者観得点: $\alpha = .84$)。次に 2 尺度値の相関係数を算出した (Table 4)。その結果、どちらも有意に高い正の相関であった (自己観得点: $r = .88$, 他者観得点: $r = .88$)。以上より、同性親友版 ECR は 2-3 週間という期間においては、再テスト信頼性が高いことが示された。

Table 3
愛着スタイルごとの平均値 (SD), 各尺度に対する分散分析

尺度名	平均値					自己観 主効果		他者観 主効果		交互作用	
	<i>n</i>	安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
	%	34.88	15.81	20.47	28.84						
1. 自尊感情尺度		4.32 (1.12)	4.26 (1.36)	3.92 (1.03)	3.71 (.99)	11.08	.001**	.72	.397	.22	.634
2. 対人信頼感尺度		3.80 (.74)	3.73 (.64)	3.88 (.55)	3.67 (.55)	.02	.866	2.41	.122	.63	.425
他者は誠実・よいもの		4.11 (1.17)	3.97 (1.15)	4.40 (.77)	4.00 (.92)	.50	.480	3.63	.058†	.75	.388
3. ストレス認知度		3.64 (1.35)	3.50 (1.55)	4.17 (1.46)	4.05 (1.55)	6.42	.012*	.42	.520	.00	.953
4. サポート欲求		5.02 (1.51)	4.24 (1.52)	5.02 (1.47)	4.52 (1.58)	.05	.833	8.40	.004**	.44	.508

† $p < .10$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4
1 回目と 2 回目の同性親友版 ECR の得点の相関 ($N = 41$)

	1 回目	自己観得点	他者観得点
2 回目			
自己観得点		.88**	.28
他者観得点		.14	.88**

** $p < .01$

本研究の目的は同性親友版 ECR を作成することであった。その結果、Brennan et al. (1998) と同様に自己観、他者観による 2 因子が抽出され、妥当性および信頼性を確認できた。よって、同性親友に対する愛着スタイル尺度として有効なものが作成された。

ECR が測定する内的作業モデルは、情動調節や人格の形成、対人関係といった研究において主要な理論的役割を果たしている (金政, 2003)。一般他者や特定他者に対して形成される内的作業モデルが対人関係の基盤を形成するが、対象間で愛着スタイルがどの程度一致しているのか、どのような関係が形成されるかについては今後愛着スタイルの比較検討が必要である (加藤, 1999)。さらに、中尾・加藤 (2004a) は、日本語版 ECR をそれぞれの愛着対象を踏まえた上で改良し、各バージョンの ECR を作成する必要があると指摘している。以上これらを踏まえ、本研究は同性親友に焦点を当てて尺度作成を行っている。

今後の課題として、同性親友版 ECR と他の理論的に関連のある尺度との相関を見る必要がある。特に他者観の基準関連妥当性に関してはまだ検討の余地があると言える。その他、項目数に対して尺度を検討するためのサンプル数が少ないことも挙げられる。以上から、実際同性親友版 ECR を用いるには再度妥当性、信頼性の検討が必要となるであろう。また、親友としてどのような人物を想像したのか、回答者によりばらつきが生じている可能性がある。本研究でも回答者に対して具体的に想像してもらったため、親友の選択の際に詳細な親友の定義を示した。しかし、親友だと断定できる一般的な認識や基準が親子関係や恋人関係と比較して曖昧であることから、研究者と回答者で親友の概念にずれが生じることは避けられない。親友の定義は様々だが (e. g. 岡田, 2007)、どのような人物が愛着対象として想像されるか、より慎重に検討する必要があるであろう。

引用文献

- Bartholomew, K., & Horowitz, L.M. (1991). Attachment Styles among young adults : A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. (1973). Attachment and Loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger, New York: Basis Books. (黒田実朗・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論 II——分離不安—— 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 46-76). New York: Guilford Press.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 66 (5), 403-409.
- 林田美咲・黒川光流・喜田裕子 (2018). 親への愛着および教師・友人関係に対する満足感が学校適応感に及ぼす影響. 教育心理学研究, 66 (2), 127-135.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Conceptualizing romantic love as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 堀 匡・小林丈真 (2010). 大学生の愛着スタイルとソーシャルスキルおよび心理・社会的適応との関連 学校メンタルヘルス, 13 (1), 41-48.
- 堀井俊章・植谷笑子 (1995). 最早期記憶と対人信頼感との関係について 性格心理学研究, 3, 27-36.
- 金政裕司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望——現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは—— 対人社会心理学研究, 3, 73-84.
- 金政裕司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19 (1), 59-76.
- 加藤和生 (1998). 他者観, 関係観, 甘え観尺度の構成 九州大学大学院心理学講座, 未発表論文.
- 加藤和生 (1999). Bartholomew らの 4 分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, 7, 41-50.
- Klohn, E. C., Weller, J. A., Luo, S., & Choe, M. (2005). Organization and predictive power of general and relationship-specific attachment models: One for all, and all for one? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 1665-1682.
- 栗須世都子・安藤明人 (2011). 就学前の愛着スタイルが大学生の愛着スタイル及び心理的ストレスに及ぼす影響 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 1007.
- MacCallum, R. C., Widaman, K. F., Zhang, S., & Hong, S. (1999). Sample size in factor analysis. *Psychological Methods*, 4, 84-99.
- Mikulincer, M., & Selinger, M. (2001). The interplay between attachment and affiliation systems in adolescent's same-sex friendships: The role of attachment style. *Journal of Social Personal Relationships*, 18, 81-106.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004a). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75 (2), 154-159.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004b). 「一般他者」を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 丹羽智美 (2003). 青年期の親への愛着によるソーシャ

ル・サポート, サポート希求の差異とそのバランスの検討——父親, 母親, 友人に焦点をあてて——名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 50, 279-284.

岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と, 適応及び自己の諸側面の発達の関連について. パーソナリティ研究, 15(2), 135-148.

Parker, J. G., & Asher, S. R. (1987). Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.

鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力

也・坂野雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4, 22-29.

Weiss, R.S. (1998). A taxonomy of relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15, 671-683.

謝辞

本論文の作成にあたり, 九州大学加藤研究室の皆様から貴重なご助言を頂きました。心より感謝申し上げます。また, 調査にご協力くださいました参加者の皆様方に心より感謝申し上げます。